6-11　実践協力校における授業実践
事例⑪　伊勢原市立伊勢原中学校
１年生　社会科〔地理的分野〕

ポイントになる主な学びのプロセス

- **課題について考える**
- **様々な考えから、自分の考えを構築する**

Ⅰ　単元計画

１．単元名　中学校第１学年　社会科〔地理的分野〕「世界の諸地域　ヨーロッパ州」

２．単元の目標　「様々な国の立場をふまえ、今後のヨーロッパの進むべき道を考えよう」

①それぞれの国の立場から、ＥＵについて考える。

②ヨーロッパの国々が、今後進むべき方向性について考える。

３．単元の指導計画（６時間扱い）

	ねらい（◇）・学習内容（◆）
1	◇地形や気候を中心に、ヨーロッパ州の国々や自然環境などの基本的な特色と、様々な民族や文化が共存していることを理解する。 ◆ヨーロッパ州の地形、緯度や雨温図から気候の特色を理解する。 ◆資料からヨーロッパ州の地域によって信仰している宗派や言語の違いがあることを読み取る。
2	◇ヨーロッパ州の産業とＥＵの統合によってもたらされる利点を考える。 ◆ヨーロッパ州では地域の自然環境に合った農業が行われていることを理解する。 ◆ヨーロッパ州の工業について、様々な資料から工業の特色を読み取る。
3	◇ＥＵの統合による課題点を資料から読み取り、各国の現状を理解する。 ◆ＥＵの統合による利点だけでなく、資料から課題点を読み取り、各国がＥＵをどのように捉えているのかを考える。
4 本時	◇ＥＵはあり続けた方がいいのか、なくした方がいいのかを考える際、ヨーロッパ州各国の立場によっても考え方が異なる等の多面的・多角的なとらえから、新たな学習課題を見出す。 ◆グループでＥＵの統合による利点と課題点を共有し、話し合うことで、様々な考えから自分の考えを構築するとともに、新たな学習課題を見出す。
5	◇ヨーロッパ州のそれぞれの国の立場から、ヨーロッパ州の今後の進むべき方向性を考える。 ◆ＥＵに加盟している国、脱退しようとしている国、もとから加盟していない国を分類し、個人が分担してそれぞれの国の立場から調べる。
6	◇様々な考えを共有した上で、今後ヨーロッパ州の国々が進むべき方向性についての考えを構築する。 ◆個人が調べた内容をもとに、それぞれの立場から今後ヨーロッパ州がどのように歩んでいく必要があるのかを主張するとともに、他者の立場の考えを聞いて、自分の考えを再構築する。

Ⅱ　本時の様子

１．本時の目標　○ヨーロッパ州の国々にとってＥＵはあり続けるべきかなくすべきかを考えて根拠を示す。
○ＥＵがあり続けるべきかなくすべきかを決めきることは難しいということに気づき、様々な国の立場からＥＵをとらえようとしている。

「政治的教養を育む教育」で身に付けさせたい力の視点

２．本時の展開

過程	学習活動（活動の流れ）	ポイントになる学びのプロセス
導入	○前時の授業でまとめた内容を確認する。 **ＥＵはあり続けた方がよいのか？ なくした方がよいのか？**	ＥＵの利点と課題点をふまえ、根拠をもとに自分の考えをワークシートにまとめている。（関心・意欲・態度）
展開	○４人グループを作り、各自がまとめた考えをグループで共有する。 ＊根拠に基づき、自分の考えを発表し合い、議論する。考えが分かれた場合は、グループで調整して一つの考えにまとめる。 ○４人グループでまとめた考えを紙に書き出し、教室内に掲示し、それらを全員で見て回る。 ＊自分たちのグループでは出なかった意見や考えを取り入れるという視点を持って活動することで、個人の考えを強化したり、深めたりする。 ○全体の考えを共有した上で、もう一度全体に課題を問いかける。 ＊最終的には、「ＥＵがあり続けた方がよいのか、なくした方がよいのかを決め切ることは難しい」ということに気付く。	課題について考える ＥＵの可否については、それぞれの国の立場によって考えが異なるため、様々な国の立場からＥＵをとらえることが必要であるという、新たな学習課題に気付く。（思考・判断・表現） 様々な考えから自分の考えを構築する
次時へ向けて	○次時の課題として、立場の違うヨーロッパ州の国（ノルウェー・イギリス・ドイツ・ブルガリア）を分担して調べ、それぞれの立場から改めてＥＵについて考える。 **それぞれの国の立場から調べてみよう**	**目指す子どもの姿** ヨーロッパ州の国々にとって、今後ＥＵがどうあるべきなのかを、様々な国の立場からとらえようとしている姿。

Ⅲ　研究協議

１．自評



○日常生活の中にこそ「政治的教養を育む」のヒントがあると考え、イギリスの離脱問題等がニュースで話題となっていたＥＵを教材として単元を構想した。この単元の学習を通して育成を目指す資質・能力を明確にし、教材の活用方法、グループで議論するテーマ、導入における発問や資料提示などについて試行錯誤した。

２．研究協議のテーマ　**＊令和元年度は共通テーマで協議を実施。**

○提案授業における「学びのプロセス」（「身に付けさせたい力」の視点）につながる児童・生徒の姿とは

３．研究協議の成果と課題

成果・本時の授業のねらいである「課題について考える」→「新たな課題を見出す」は達成できていた。
・他の班のまとめた意見を見合う中で、自分の意見と比べて、良いと思ったものを取り入れ、自分の意見を再構築する姿が見られた。

課題・ＥＵによる利点と課題点を多面的・多角的にとらえることに気付かせる必要がある。
（例：ＥＵ加盟国から安価な労働力を得て経済発展する利点と、難民受入れに伴う課題点）

Ⅳ　実践協力校での授業実践を基にした指導事例

R１-３　中学校１年生　社会科[地理的分野]　指導事例
「世界の諸地域　ヨーロッパ州」

【単元目標】
・「様々な国の立場をふまえ、今後のヨーロッパの進むべき道を考えよう」
①それぞれの国の立場から、ＥＵについて考える。
②ヨーロッパの国々が、今後進むべき方向性について考える。

【目指す子どもの姿】
・ヨーロッパ州の国々にとって、今後ＥＵがどうあるべきなのかを、様々な国の立場からとらえようとしている姿。

１　本単元の流れと「政治的教養を育む学びのプロセス」との関係

学　習　活　動（全６時間）	ポイントになる学びのプロセス
ヨーロッパ州の地形、自然環境、文化について① ○地形や気候を中心に、ヨーロッパ州の国々や自然環境などの基本的な特色と、様々な民族や文化が共存していることを理解する。 **ヨーロッパ州の産業とＥＵの統合によってもたらされる利点について①** ○ヨーロッパ州では地域の自然環境に合った農業が行われていることを理解する。 ○ヨーロッパ州の工業についての資料から、ＥＵの統合による利点を読み取り、各国の現状を理解する。 **ＥＵの統合による課題点について①**　**ポイント1** ○ＥＵの統合による課題点を読み取り、各国がＥＵをどのようにとらえているのかを考える。 **ＥＵはあり続けた方がよいのか、なくした方がよいのか？②**　**ポイント2** ○グループでＥＵの統合による利点と課題点を共有し、話し合うことで、様々な考えから自分の考えを構築するとともに、新たな学習課題を見出す。 Ｔ：話し合いや、他のグループの意見を見たことで、ＥＵはあり続けた方がよいのか、なくした方がよいのか、全体で意見を言ってくれる人はいますか？ （以下、様々な観点から、双方を指示する意見が飛び交う） Ｓ：ＥＵでまとまることで、アメリカや中国等の他国に対抗できる利点がある。 Ｓ：でも、ＥＵがあるから、各国が自立できないっていうか…。例えば、ベラルーシは小国だけど、親ロシア派だからＥＵに加盟していない。ＥＵに頼り過ぎると、ＥＵの中で影響力があるドイツ等が弱体化したら、かえって困るんじゃないかな。 Ｓ：それぞれの国の立場から考えると、ＥＵをどうすべきか意見が分かれてしまう。 **Ｔ：それなら、次の時間は、ＥＵに加盟している国、脱退しようとしている国、もとから加盟していない国に分けて、それぞれの国の立場から調べ直すことにしましょう。** **今後のヨーロッパ州の国々が進むべき方向性について考える①** ○調べた内容をもとに、それぞれの立場から今後ヨーロッパ州がどのように歩んでいく必要があるのかを主張するとともに、他者の立場の考えを聞いて、自分の考えを再構築する。	**○課題について考える** **○様々な考えから、自分の考えを構築する**

2　政治的教養を育むためのポイント

ポイント1

生徒の興味・関心を引き出すような、学習課題の設定を工夫しましょう。

中学校社会（地理的分野）では、自分の生活圏から離れた国や地域、また地球的規模の課題を扱う学習が多くなります。しかし、それらの課題が、実は自分の生活と密接に関連していることに気づかせたいところです。本事例では、イギリスのＥＵ離脱について話題となっていた時期に、ＥＵを教材として単元を構想することで、生徒の興味・関心を引き出していました。このように、学習課題の設定に様々な工夫をすることで、生徒の興味・関心を引き出すことが重要です。

ポイント2

自分の意見の深まりや変容を自覚できる活動を取り入れましょう。

本事例では、他者の意見と自分の意見を比較する手立てとして、他の班のグループ協議のまとめの掲示を見合い、**自分の意見と比較し、良いと思ったものを取り入れる**ことを授業者が促すことで、生徒が自分の意見を深める姿が見られました。



また、自分はどのくらいの割合で、「ＥＵはあり続けた方がよい（赤）か、それともなくしたほうがよい（青）か」を考えているのか、生徒一人ひとりが授業のはじめと終末に二色の丸い画用紙で意思表示する活動を行う（写真下参照）ことで、**自分の意見の変容を自覚できる**ように工夫されていました。



このように、政治的教養を育むには、生徒が、様々な意見を自分の中で考え合わせながら、自分の考えを深めていく学習活動を取り入れることが大切です。

中学校社会科における「政治的教養を育む教育」につながる授業展開例

【他の班のグループ協議のまとめの掲示を見合う場面にて】

Ｔ：自分たちの話し合った内容と比較して、**他の班の意見でよいと思う意見があったら、積極的に取り入れるつもりで、**他の班のまとめを見ましょう。

Ｓ：ＥＵがあるから、パスポートがなくても自由に行き来できるけど、犯罪者も自由に行き来できるのか。**こんな考え方があるんだな…。**（つぶやきながらメモを取る）～中略～

Ｔ：今日の授業を通して、ＥＵはあり続けた方がよいのか、なくした方がよいのか、自分の中で、答えは出ましたか？

Ｓ：（僕は、答えを）出せるよ！

Ｓ：（私は、話し合って、）むしろもやもやした気持ちになった。

Ｓ：ＥＵは、まだ、今はあり続けた方がいいのかな…。～後略～

ポイント2

授業者が、「自分たちのグループでは出なかった意見や考えを取り入れるという視点を持って活動する」ように促すことで、個人の考えを強めたり深めたりする姿が見られました。